

マタイによる福音書 1:1~17

聖書を初めて開いたときのことを思い出します。最初に手にした聖書は、高校の頃にいただいたギデオン協会の聖書でしたが、聖書というタイトルが気になったからなのでしょう。大学進学で親元を離れ、その間、何度か下宿を変わったりもしたのですが、捨てずにずっと手元に置いていました。しかし、開いた記憶は一度もなく、この聖書を初めて開いたのは、社会人になって壁にぶつかったときのことでした。何か気の利いたことが書いてあるに違いないと思ったからなのですが、ただ、この試みは読み始めて直ぐに挫折することとなりました。新約聖書の1ページ目から読み始めたのがよくなかったのですが、どうやらこうした経験は私だけではないようです。教会内ではよく聞く話で、ですから、マタイによる福音書のこの最初の箇所は、聖書を読まない口実を人に与えるものだとも言えるのでしょうか。なぜなら、どうして聖書を読まないのですかと問われ、1ページ目で挫折したからと答えれば、それで多くの方が納得してくれるからです。ちなみに、皆さんは、言い訳をする方でしょうか、それとも、説明を聞き、仕方ないと思う方でしょうか。どちらでしょうか。

それにしても、どうしてこの最初の箇所で躓く人が多いのか。それは、人の目を引くところがまったくないからです。つまり、読み手のことをまったく配慮していない、そういう独りよがりな印象を与えるものがこのマタイによる福音書の最初の箇所であるからです。ですから、他の福音書と順序を入れ替えれば、聖書の取っ付きの悪さは少しは良くなるのかもしれませんが、けれども、どんなにぶっきらぼうな印象を与えようとも、それが私たちにとっての聖書なのです。一字一句、手を加えることは許されない、だから、聖書は聖書と言われてもいるのです。では、私たち読み手の気持ちを削ぎ、福音に触れるのを拒むのが、私たちが聖書と呼んでいるものなのでしょうか。もちろん、そうではない。特別な読み手を選んだり、また、新たな読み手を選んだりするものを、私たちは聖書と呼

んだりしていないからです。そして、それは、このマタイによる福音書もそうです。

マタイによる福音書が記されたのは、学者によれば、紀元後90年前後とされています。つまり、エルサレムがローマによって滅ぼされてからしばらくしてのことであったということです。そして、このイエス様の物語の担い手はディアスポラのユダヤ人と呼ばれた人々であると言われておりますが、ただ、この離散の民は、エルサレムから逃れた人々だけではありません。当時、すでに各地に多くあり、それゆえ、マタイによる福音書は、特定の、ある特殊な人々だけを対象としているわけではありません。分かる人、興味のある人だけを対象とはしているわけではなく、マタイの教会の半分くらいの人たちが異邦人キリスト者であったと言われておりますように、その担い手の中心がユダヤ教からの改宗者であったとしても、様々な背景を持つ人々の中で語り継がれていったものがこのマタイによる福音書でもあるのです。それゆえ、教会の人々は自らの原点、出自というものを確かめなければなりません。自分たちの歴史はこういうものなんだとの一致がなければ、教会という交わりを保つことが難しいからです。ですから、1章1節で「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」とあるところからは、人々の意気込みと覚悟を感じないわけには参りません。

そして、人々のその熱い思いを支えたものは、他でもない、イエス・キリストというお方がユダヤの伝統と歴史の中から生み出されたというこの事実です。ところが、この意気込みが私たちの躓きの理由でもあるのです。それは、言うまでもなく、私たちの出自がユダヤという土地とはまったく無縁なものでもあるからです。だから、そのことを殊更に強調されることは、私たちにとってあまりいい印象を与えません。特に、ユダヤ人のコミュニティとも、また、キリスト教のコミュニティとも、そのどちらとも関わった経験がない、書物としての聖書だけに

触れている人にはなおのことです。私が開いた聖書を直ぐに閉じたのにはそのためでもあります。ところが、その私が今や聖書から毎週、毎週、皆さんにこうして何かを語りかけているのです。ですから、それについては私自身一番驚いてもいるのですが、ただ、それにしても、どうしてそのような大きな変化がもたらされることになったのか。私は、ここに聖書の御言葉の力強さというものを感じないわけにはまいりません。けれども、それは、私が強い意志の持ち主であったからでもなく、また、青雲の志に駆られたからでもあります。もちろん、高い理解力や豊かな感性を持っていたからでもあります。自分の力で聖書の御言葉との間にある距離を縮めたわけではないからです。

ところで、これは折りにつけ皆さんに申し上げていることですが、聖書が私たちに何かを語る目的は何か、それは、聖書を中心に置いたコミュニティ、共同体を築き上げることです。つまり、私の身の上で起こった変化は、私個人の問題として起こったことではなく、交わりを築くべく起こった出来事であったということです。そして、それは、私だけでなく、皆さんもそうですし、また、マタイによる福音書の担い手の人々もそうです。ところが、聖書の周りに集められた人々は、皆が皆同じ出自、同じ価値観、同じ考え方の人々ではありません。つまり、味の好みに始まって、好きなものや嫌いなもの、何に喜び、何に憤り、何に困るのか、そういう生きる上での価値観や考え方がすべてにわたっててんでんバラバラであったのがその担い手であるということです。ですから、それを纏め上げることは容易なことではありません。けれども、この大なる挑戦を始めたのは、他でもない神様ご自身です。ですから、神様ご自身が挫折するわけには参りませんし、そもそもこのところで、そうしたことは初めから想定されてはおりません。そして、事実、そうではなかったわけで、だから、主イエスの物語にこうして聞いている人々が次から次へと生み出され、歴史を貫いて、教会という、一つの大きな形を伴うものへと発展していくことにもなったのです。ただし、人がそれをイメージできるようになるまでには長い時間を要しました。そのために要した時間はおおよそ千年くらいであったと言われてはいますが、ですから、今日のこの

箇所が、もし本当に人との対話を拒んでいるとしたら、聖書の御言葉が世界に広がり、その理解が深められ、教会という一つの交わりが人類の歴史に刻まれることはなかったはずで、おおよそ1500、1600年とも言われている、このアブラハムに始まってイエス様に至る系図の語る場所は、交わりを築くべく働かれる神様の御心が歴史を通じて一貫性しているということです。

このように、物事の始まりである今日のこの箇所は、そもそもこのところで対話を拒み、人を排除するために記されたものではありません。そして、その力の源泉こそが私たちが愛と呼んでいる神様の御心でもあるのです。だから、当然のことではあります。私たちの交わりはこの愛によって築かれることとなります。まただから、私たちの交わりを聖書の御言葉は神の家族と呼んだりもするのです。従って、出自や価値観や趣味趣向の違う私たちがそれぞれの拘りを手放し、神様に喜ばれるべく大きく変えられていくのは、この愛ゆえのことでもあります。つまり、それが一つとされるということであり、また、そこに築かれたものが教会という交わりであるということです。それゆえ、私たちはいつまでもてんでんバラバラなままであっていいわけではありません。聖書の御言葉によって私たち一人一人は変えられていかなければならず、そもそもこのところ言えば、そこで変えられた人々の集まりが教会という交わりであるということです。

ですから、ここに登場する一人一人は、そういう意味で神様の御心によって大きく変えられた人々であり、そこでまず最初に登場するのがアブラハムです。そして、このアブラハムは、アブラハム、イサク、ヤコブの神と言われるように、私たちが神様について何かを語る上で絶対に外すことのできない人です。それは、神様の突然の召しに従って、乳と蜜の流れる地、カナンを目指して、全財産を携え、一族郎党すべてを引き連れ、彼の地を目指したのがアブラハムであり、そして、このアブラハムから始まったものが神の民であるからです。それゆえ、アブラハムについてはどれほど評価しても評価し尽くせることはありません。ところが、そういう目でここに記されている一人一人を見ていくと、実に様々、この人も、と思う人の名前までも見つけることができるのです。3節にあ

るタマル、5節のラハブとルツ、そして、名前すら記されてはおりませんが、6節には皆さんよくご存じのウリヤの妻とのみ記されている者も見つけることができるのです。そして、この人たちは皆女性です。しかし、普通に子をもうけ、育て、命を次の世代へと繋いだ人々ではありません。タマルとラハブは遊女であったといわれていますし、ルツは異教徒であり、ウリヤの妻バトシェバに至っては数奇な運命によって不義の子をもうけることになった人です。ですから、本来であれば、歴史の表舞台に登場することのない人たちですが、けれども、その名が系図に記され、表舞台に登場している。それは、ここに歴史を貫く神様の御心を見ることが出来るからです。しかし、私たちの目から見ればとどうか、このことは一貫性を欠いているとしか思えません。

神様の御心は、ここにその名が記されている人々だけでなく、その背後に隠された、名もなき人々の上にも注がれています。だから、系図は、聖書において非常に重要な意味を持つのですが、それは、聖書において人間とは、生きるか死ぬか、発展するか衰退するか、ただそれだけのものではないからです。神様の祝福によって時間と空間の内に広がりをもって造られたものが人間であり、系図はそのことを私たちに伝えるものなのです。従って、系図が私たちに伝えることは、神様の祝福の内側に置かれてこそ、人間は人間たり得るということです。そして、このことはまた、ある時点でのみ通用するものではありません。世界が造られたその始まりから終わりまで続くものであり、この神様の御心に包まれているのが私たち人間であると、系図にはそういう意味が込められているのです。ですから、新約聖書の最初のところでそういう人間に向けられた神様の祝福が記されているということは、つまりは、イエス・キリストの出来事が示すことは、神様の救いの御業が時間と空間の中で世界全体に広がっていくものであり、マタイによる福音書は、この神様の宣言をもって語り始められているということです。ですから、こうして御言葉に聞いている私たちは、そういう意味でここに記されている系図とは無関係ではあろうはずはありません。系図にある名前は私たち一人ひとりであり、それゆえ、私たちが変えられるということは、つまりは、系図

にその名を見出すものとなったということです。系図の中に収まりを見出しているのが私たちであるということなのです。

そこで、改めてここに記されているその名を見て参りますと、そこには、アブラハム、イサク、ヤコブ、さらには、ダビデ、ソロモンと、名だたる信仰的英雄の名前を見出すことができます。けれども、その一方で、先ほども少し触れましたが、そこには歴史の表舞台に登場するのも憚れる人々もいるのです。それだけではありません。私たちがよく知っているイザヤ、エレミヤなどの預言者の名前が一人も見出すことができないように、この人はと思う人々の名前もありません。従って、そういう意味で、そこに名前があるかないかは大きな問題ではありません。けれども、そこに名前がないということは、人によっては不安を感じさせるものです。ですから、そういう意味で、私たちが疎外感を感じるのは、初めて聖書に触れたときだけではありません。そして、それは、ここにその名を記された人々も逆の意味では同じです。なぜなら、アブラハムが保身からエジプトのファラオにその妻サラを差し出したように、イサク然り、ヤコブ然り、ダビデ然り、ソロモン然り、信仰的英雄と言えども、それぞれ落ち度があることを私たちはよく知っているからです。つまり、名前があるということは、恥を知り、その罪を知っている者にとっては逆の意味で恥ずかしいことであり、それゆえ、見方を変えれば不安の種でしかないということです。

このように、そこにその名を記されている人もいない人々も、イエス様の物語の担い手であったマタイの教会の人々も私たちも、御言葉を前にしたとき、すべてが同じように疎外感を感じながら生きるしかないのですが、それは、人が生きるということが不安と切り離されたところには置かれていないからです。ところが、その私たちが時を越え、場所を越えて、世界に広がっていった、チャップリンが「人生はクローズアップで見れば悲劇だが、ロングショットで見れば喜劇だ。」と言ったそうですが、神様の御心の内側を生きる私たちの人生とは、まさにそういうものだということです。つまり、系図が私たちに伝えることは、私たちの人生が、仮にどれほどの悲劇に見舞われようともそのままでは終わらないと

ということです。なぜなら、御心によって必ず喜劇に変えられていくからです。つまり、笑えない話であっても必ず笑える話に変えられていく、系図にはそういう意味があるのです。ですから、そう考えれば、私がこうして今この場に立たされていることは、悲劇であると同時に喜劇であるということです。そして、それは、人生というものが自分一人だけの力で築かれるものではないからです。なぜなら、神様の祝福の内に置かれているのは自分一人だけではなく、神様に創られたこの世界に生きる私たちは、実に様々なものとの関わりの中に生きています。

ですから、系図の最後にイエス様の名前が置かれているのは、イエス様がまさにそういう関わりの中を歩んだということであり、つまりは、そういう人と人との関わりの中に収まるものが、系図にその名を刻まれた私たちであるということです。ただし、様々な関わりは、関わるがゆえに私たちを躓かせます。そして、その中で最も大きなものが神様の御心であり、その現れであるイエス様の十字架と復活の出来事です。それは、地に生きる私たちには、天のことをにわかには受け入れることができないからです。それゆえ、私たち人間にとって福音は躓きでしかありません。躓くしかないのが福音というものでもあるのです。ですから、それが新約聖書の一番最初に記されているというのは何をか言わんやということです。鉄は熱いうちに打て、ということではありませんが、躓くなら早いに越したことはないということでもあるのでしよう。ですから、そういう意味で、聖書は私たちに媚びず、なびかない。だから、私たちは福音に躓くしかないのですが、けれども、ここにまた、系図を通して語られた聖書の重要なメッセージがあると思うのです。

私たちの人生は、読みたいものだけを読み、見たいものだけを見、聞きたい者だけを聞き、食べたいもの、飲みたいものだけを口にしていればそれですむものではありません。聖書において系図が重要な意味を持つのはそういう意味でのことでもあります。ところが、私たちはどうなのでしょう。系図をつまらないもの、自分とは関わりのないもの、それゆえに躓きでしかない、とってしまう。それは、私たちが様々なものとの関わりながら生きていくということを受け止める

ことができないからです。だから、変わることに躊躇してしまおう、まただから、変わらねば、変えねばと焦ってしまう、それは、どちらも、このままでは立ちゆかないが分かっているからです。そして、それは、私たちがそれでも身の置き所を変えるところができないからです。つまり、人間とはそういうものであり、そして、系図はそのことも私たちに教えてくれているのです。

ならば、私たちはどうすればいいのか。兄エサウとヤコブの和解がどのようにもたらされることになったのか。それは、神様がヤコブの罪を軽く見たからではありません。兄エサウとの再会をヤコブが恐れたのは、自らの罪と向き合ったからでもあります。それは同時に、ヤコブが神様のことを恐れたからです。ところが、そのヤコブが兄エサウと再会し、和解することができた、それは、ヤコブが神様の御前にあって自らを再発見したからです。つまり、神様と和解することが許された、兄エサウとの和解はそれゆえに実現することになったのです。そして、私たちにあってそれがイエス・キリストの出来事であり、それゆえ、この神様の赦しを受け入れたとき、私たちは必ず変えられていくことになるのです。つまり、聖書を理解してもしなくても、イエス様と共にあることを信じる私たちは、すでに神様の赦しの中に置かれているわけですから、変わらなければとか、変えなくてはとか、血相を変えて何かをする必要はありません。そういうことを考えなくとも、私たちの将来はイエス様が共にいますがゆえに、神様に喜ばれるべく必ず変えられていくのです。マタイによる福音書はこのことを最初に語り、しかも、ただ語るだけではなく、実際にそのように生きた人々の名前を記すことで、具体的にそれが事実であることを私たちに伝えてくれているのです。

コロナ下にあっても、もしかしたら、福音は、私たちが喉から手が出るくらい欲しいと思えないものなのかもしれせん。けれども、そのような私たちだからこそ、聖書の御言葉はなお語りかけてくれるのです。安心しなさい。さあ行きなさいと。祈りましょう。